

128. 絹本著色薬師十二神将像 保存修理事業

観音寺 代表役員 小藪 実英

<修復前>

表具全図



本紙全図



絹本著色薬師十二神将像

寸法

本紙：縦 118.5cm 横 59.6cm

表装：縦 199.5cm 横 78.7cm

京都府

解説

本像は鎌倉時代末、十四世紀前半に遡る薬師十二神将像の優品である。特に十二神将の面貌や肉親の立体表現は極めて繊細な彩色に基づき高度な絵画表現を達成したもので、その優れた表現は特筆に値する。

しかし、江戸時代の天明六年に補修されて以来、修理を施されていないので全体に本紙絹の亀裂や彩色顔料の浮きなど、展示はおろか開披するのも危険な状態であった。

此度の修復事業で亀裂や顔料の浮きもおさえられ、安定した画像に戻す事ができた。今後は高野山桜池院本、藤田美術館本に次ぐ古い薬師十二神将像として展示公開しその後は大切に保存していく所存である。

<修復後>

表具全図



本紙全図



修復業者

株式会社 光影堂

修復内容

本文化財は度重なる部分的な補修によって構造が著しく複雑化し、これに起因する損傷が進行していたため、過去の修理で付加された裏打紙や補修絹などを全て取り除いて本紙料絹1枚の状態とした上で、欠失箇所同一の補修絹を入れて新たに適切な色味的美濃紙で肌裏打を行い、欠失箇所全体に均一な補彩を施すことで、構造を安定させ、かつ鑑賞性の回復を図った。

本紙を直接支持する旧肌裏紙は著しく脆弱化していたため、本紙の表面に布海苔水溶液と養生紙で表打を行う方法で、裏面から少量ずつ旧肌裏紙及び旧補修絹を除去した。

軸装仕立てに際し、新たな裏打紙、表装裂地、金鍍金軸、桐太巻添軸は、選定保存技術保持者等が製作した材料を使用した。

修理報告書

京都府暫定登録文化財・福知山市指定文化財

絹本著色薬師十二神将像

（宗教法人観音寺蔵）

令和八年三月

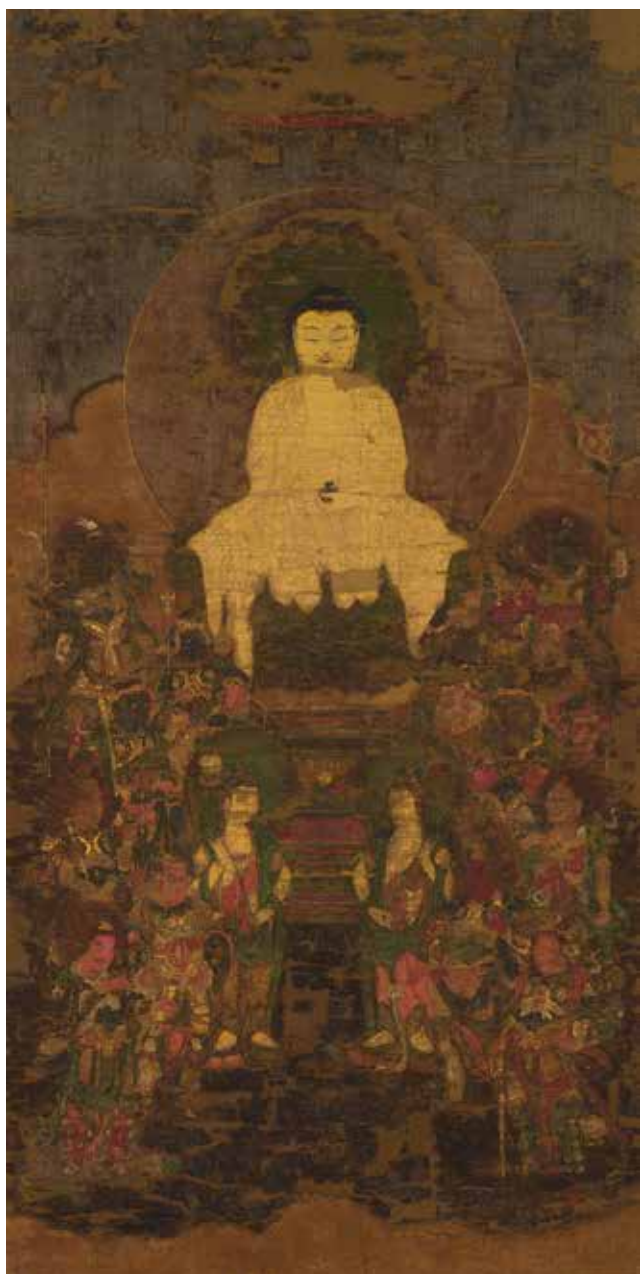
株式会社 光 影 堂



修理前 表装全図



修理後 表装全図



修理後 本紙



修理前 本紙

一、本書は、京都府指定・登録文化財等補助事業補助金、福知山市文化財保全事業補助金、公益財団法人三菱財団文化財保存修復事業助成により令和六・七年度に施行した、絹本著色薬師十二神将像の修理報告書である。

一、本書の執筆は、株式会社光影堂主任技師三日市淳が行い、編集を企画総務部企画課長東野鈴奈が行った。

一、写真は、一部を除き株式会社光影堂が京都国立博物館文化財保存修理所において撮影した。

一、寸法の単位は、特に記載がない限りセンチメートルである。

〔修理事業の概要〕

一、文化財の名称

種別…京都府暫定登録文化財・福知山市指定文化財 絵画

名称…絹本着色薬師十二神将像

員数…一幅

所有者…宗教法人 観音寺

二、工期

自 令和 六年 四月 二十六 日

至 令和 八年 三月 二十三 日

三、施工者

株式会社 光影堂 代表取締役 大菅 直

修理担当者…主任技師 三日市 淳

〔修理前の状況〕

一、品質形状（口絵写真）

形 式…掛軸装（二段仏表装）

中 廻…白茶地唐花紋金欄

総 縁…茶地牡丹唐草文綾裂

筋 …外側白地平織 内側紫地平織

軸 首…蓮華唐草文鍍金軸

保 存 箱…桐製太巻添軸及び桐製屋郎箱

二、寸法

本紙	縦	一一・八・五	横	五九・六
表装	縦	一九九・五	横	七八・七
中廻	上	一一・一	下	五・七
中柱	巾	一・一		
総縁	上	四二・〇	下	二一・四
柱	巾	七・九		
風帯	巾	三・〇		
軸首	径	二・八	出	二・九

三、本紙の状況

絹継ぎのない一枚の料絹に描かれる。料絹表面に経年の汚れが蓄積して本紙をくすませ、沈んだ色味となり鑑賞を妨げている。画面全体に光沢感があり、なんらかの接着剤が塗布されている（後述）。料絹欠失箇所では裏彩色の露出が認められる。

◇料絹の折れ、亀裂

画面全体に横方向の折れが発生している。一部の折れが亀裂に進行し、肌裏紙から浮き上がる（写真1）。巻舒の度に亀裂の頂点が擦れ、料絹の欠失に繋がっている。料絹が硬化し、肌裏紙の糊の接着強度が低下していることが横折れの主たる原因と考えられる。



写真1 料絹の折れ

◇欠失と補修

料絹の随所に欠失が生じている（損傷図面）。本紙上部に描かれる天蓋や光背部分の広範囲の欠失は、緑青や群青など銅成分を含んだ絵具の化学変化の影響（絵具焼け・緑青焼け）により発生したものと考えられる。

欠失部分には過去の修理で補修が施されている箇所が多い。三種類の補修絹が混在しており、過去の修理の度にそれ以前の補修絹を除去せず、その都度付け加えられてきたと考えられる（写真2）。

いずれの絹も本紙料絹の織組織とは異なるものが使用され、絹目の方向も均一ではない。裏面から二種類、表面から一種類の補修が行われている。裏面からの補修は料絹に直接施されているものと、肌裏紙上から施されているものがあり、どちらの補修も本紙料絹との重なりが大きい（写真3）。

欠失の形通りに補修を行なっておらず、帯状や四角に切った絹で補修されている。補修絹と補修絹、料絹と補修絹が重なる箇所では本紙料絹が押し上げられ、巻舒の度に擦れ、料絹の欠失に繋がっている。また、黒く染められた帯状の紙で補修されている欠失も認められる（写真4）。

表面から行った補修は比較的欠失の形に添って入れられているが、重なりもある。濃い糊を使用して補修を行なっているため、絹目が糊で詰まって黒く光沢を帯びている（写真5）。

状態の違う三種類の補修絹と紙による補修が混在して画面を煩雑にし、鑑賞の妨げとなっている。

◇絵具層、過去の修理における剥落止め

本来多種の絵具を使用した色鮮やかな作品であるが、濃い墨色の肌裏紙や補彩により画面が暗くなり、細やかな表現を視覚することが難しい。過去の修理で剥落止めのために画面全体に濃度の濃い膠水溶液が塗られていること



写真4 紙による補修



写真2 複数の補修絹の混在



写真5 表からの補修

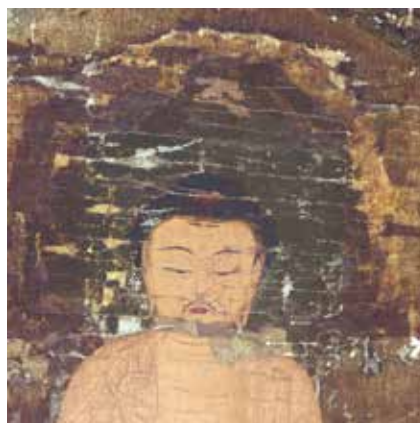


写真3 補修絹の重なり



損傷図面 赤色が料絹欠失箇所

も、画面を沈ませる原因のひとつである。

本文化財の絵具層は摩耗してなお厚みが保持されている。そのため濃い膠水溶液が絵具層内部にまで浸透することなく、絵具の表面に留まって乾燥し、料絹と絵具層の硬化を引き起こしている。

肌裏紙の接着力が低下した状態で巻舒を繰り返し、硬くなった表面に亀裂が生じている（写真6）。膠に強く引かれた絵具に影響されて料絹の剝離・剝落も生じている。薬師如来の肉身部等の金色を使用した箇所では絵具層表面にピーリングがみられる（写真7）。

◇肌裏紙

濃い墨茶色の肌裏紙で肌裏打が施されている。欠失箇所から墨色の肌裏紙が覗き、鑑賞の妨げになっている。前回の修理（平成十二年）では肌裏紙の刷新は行われておらず、長期にわたり肌裏紙の取り替えが行われていないため、肌裏紙の糊の接着強度が低下している。

本文化財は修理の痕跡から今回の修理前に少なくとも三回の修理が行われているが、いずれの機会にも肌裏紙全体の取り替えは行われていない。損傷箇所や肌裏紙が除去しやすい箇所のみを取り替えており、修理の度に部分的に貼り重ねられ、複数の色味の肌裏紙がパッチワークのような状態で混在している（写真8）。構造上極めて不安定であるため、適切な紙と糊で均一な肌裏紙に刷新する必要がある。

肌裏紙が不均一なため、絵具の薄い無地場に斑が発生している。これを是正し、見え方を均一にするために表面から無地場に墨が塗られており、裏打層に浸透している（写真9）。



写真9 裏打層に浸透した後補の墨



写真8 複数の肌裏紙の混在

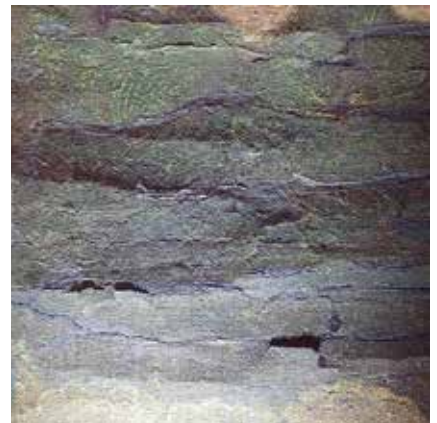


写真6 料絹の亀裂



写真7 絵具層のピーリング

◇補彩

主に表面から施された補修絹上に補彩が確認できる。全体に暗い色調の補彩で、補修絹と本紙料絹をまたぐようにはみ出し（オーバーペイント）、表現を阻害している（写真10）。

特に、薬師如来の首や裳裾の欠失箇所には施された黒い補彩は、周囲が金色であるため鑑賞者の目を引き（写真11）、本文化財の印象に重大な影響を及ぼしている。

四、表装の状況

◇表装裂

本文化財の表装形式は二段仏表装形式で、中廻に白茶地唐花紋金欄、総縁に茶地牡丹唐草文綾裂が使用される（写真12）。裂の特徴と総裏紙に記された修理銘から平成十二年の修理で取り付けられたものであるとわかる（写真13）。前回の修理では肌裏紙を取り替えていないため、修理後二十五年ほどで本紙の抱えた汚れや絵具焼けの影響で総裏紙に茶変が生じている。

総縁上部が大きく前に迫り出し

（写真14）、柱部分に波打ちが見られ、表装全体がバランスを失っている。

◇軸首・吊金具

軸首には蓮華唐草文様が彫金された鍍金軸が使用される（写真15）。



写真15 金軸



写真10 補彩



写真12 表装裂



写真11 薬師如来首部分の補彩



写真14 バランスを崩した表装



写真13 平成12年の修理銘

◇保存箱

保存箱として平成十二年の修理で新調した桐製太巻添軸入及び桐製屋郎箱が付属する。保存箱は再使用可能と考える。

〔修理後の状況〕

一、品質形状（口絵写真）

形 式…掛軸装（二段仏表装）
 中廻・風帯…本藍変り鱗地一重牡丹唐草文金地金襴
 総 縁…山吹地雲文綾裂
 筋 …内側 白茶地平織 外側 浅葱地平織
 軸 首…蓮華唐草文金鍍金軸
 保存箱…桐製太巻添軸（新調）及び桐製屋郎箱（再使用）

二、寸法

本紙	縦	九三・八	横	四二・〇
表装	縦	一八六・四	横	五九・八
中廻	上	一四・八	下	八・九
中柱	巾	〇・九		
総縁	上	四五・四	下	二二・六
柱	巾	七・五		
風帯	巾	三・〇		
軸首	径	三・〇	出	三・四

三、使用材料及び製作者等

補修絹	電子線劣化絹	※廣信織物（京都）製作の平織絹を電子線照射（日本原子力研究開発機構高崎量子応用研究所）にて劣化させたもの
肌裏紙	楮紙 二・五匁	鈴木竹久（岐阜）
※矢車・胡桃・墨により染色、木灰により媒染		
増裏紙	美栖紙	上窪良二（奈良）
中裏紙	美栖紙	上窪良二（奈良）
総裏紙	宇陀紙	福西正行（奈良）
※矢車による染色、木灰による媒染		
折伏紙	薄美濃紙	鈴木竹久（岐阜）
膠	鹿膠	日本文化資産支援機構（奈良）
中廻・風帯	本藍変り鱗地一重牡丹唐草文金地金襴	
総縁	山吹地雲文綾裂	廣瀬純一（京都）
筋裂	薄茶地平織絹	鳥居（京都）
上巻絹	平織絹	廣瀬純一（京都）
軸首	蓮華唐草文金鍍金軸	松田聖（京都）
保存箱	桐製太巻添軸	石塚良信（京都）

〔修理方針〕

所有者及び京都府担当者、福知山市担当者と協議の上、以下の修理方針に基づいて修理を実施した。

本文文化財は、長期にわたり肌裏紙の取り替えを伴う解体修理が行われておらず、肌裏紙の糊の接着強度が低下していた。また過去の修理で施された複数の時代の補修が残存しており、本紙料絹の剝離・剝落を引き起こしていた。さらに、絹目や色の異なる複数の補修絹が残存していることで画面を煩雑にし、鑑賞上大きな違和感を与えていた。よって、それらの除去を行い、肌裏紙の打ち替えを伴う解体修理を行うことで、構造的にも視覚的にも安定させることを修理方針の主軸とした。

◇補修絹の除去

本紙料絹の欠失部分には各時代の修理で施された補修絹があり、およそ三種類の補修絹が混在していた。これら補修絹の色味・質感が本紙と調和しておらず、鑑賞の妨げとなっていた。また、欠失よりも大きくあてられていることで本紙料絹・他の補修絹と重なり、本紙料絹の損傷の要因になっていた。

補修絹には補彩が施されているが、本紙の情報と補完するような補筆は見られなかった。クリーニング後に所有者及び行政担当者との協議を行い、補修絹は全て除去することを決定した。

過去の複数回の修理で付加された要素を一度全て取り除き、今回の修理で全ての欠失箇所同一の補修絹を入れて構造を安定させ、補修箇所に均一な補彩を施すことで鑑賞性を回復させた。

◇肌裏紙の除去

本紙料絹には多くの欠失があり、細かく補修されていたものの、料絹の断片化が進み、当初位置からの移動も見られた。料絹の欠落から裏彩色が露出している箇所もあった。以上のような状況から、裏彩色の保護と断片化した本紙料絹の安全性を保持するために、乾式肌上げ法での肌裏紙除去を選択した。養生紙と常温抽出布海苔で表打を施して本紙の表面をいったん固定し、乾燥後に裏面から小区画ごとに水分を与え、少量ずつ肌裏紙を除去した。

◇新しい肌裏紙

修理前に打たれていた肌裏紙は濃い墨色で、これにより本紙全体が暗く、繊細な表現を視覚することが困難であった。本紙の表現をより鮮明に鑑賞できるようにするためには明るい色の肌裏紙を打つ必要があった。しかし、薬師如来の首の欠失箇所は画面が明るくなりすぎると目立つ恐れがあった。また、上部の広範囲の補修箇所では、明るい肌裏紙を使用することで絹目から肌裏紙が地透けし、損傷箇所が修理前以上に明確になると予想された。そのため、繊細な表現の邪魔をせず、薬師如来や上部欠失箇所の見え方に悪影響を及ぼさない、やや濃い茶色の肌裏紙を使用した。

◇表装

修理前の表装裂は平成十二年に取り付けられたものであるため、再使用は可能ではあったが、肌裏紙を取り替え明るくなった本紙とは調和しないと考え、明るくなった本紙と明瞭になった表現が際立つ裂地を新調することとした。

表装形式は二段仏表装を踏襲した。選定保存技術保存団体構成員による製織に係る裂地を使用し、中廻・風帯には金欄、総縁には綾を用いた。取り合わせは所有者、行政担当者との協議の上で決定した。

発装、軸木、啄木、鐙などの部材は歪みなどの損傷が見られたため、全て新調した。

軸首は蓮華唐草文鍍金軸が用いられていたが、今回の修理を期に、選定保存技術（美術工芸品鍍金具製作）保持者の製作による金鍍金軸を新調した。文様の意匠は本文化財のために蓮華唐草文を描き起こした

◇保存箱及び太巻添軸

平成十二年に新調された桐製太巻添軸及び屋郎箱が付属していた。屋郎箱の密閉性は保持されており、汚れや損傷もなく、箱書が揮毫されていることも鑑み再使用した。但し、本紙に直接触れる太巻添軸は、選定保存技術保存団体構成員の製作により新調した。屋郎箱には裂製の覆いを取り付けた。

修理中に生じた旧表装裂等の古巣類、天明六年の修理銘（特記事項参照）と平成十二年の修理銘は中性紙製の保存箱を新調して納入し、返却した。

〔修理工程〕

一、調査

表装を含めた損傷図面及び各寸法表を作成した。損傷図面の作成はクリーニング後に行った。

顕微鏡を用いて絹目や絵具層を観察し、補修絹選択の参考とした（特記事項参照）。

絵具の接着の強度を確認するパッチテスト（絵具パッチテスト…二ミ



写真 16 調査

リ角の吸い取り紙を湿らせて描画材料の上に置き、色の移動を確認すると同時に、水に弱い箇所を把握する）を行い、剥落止め時の参考とした。

本紙全図、表装全図、ディテール写真、透過写真撮影および赤外線撮影を行い修理前の状態を記録した（写真16）。

二、解体

本紙と中廻の間の筋裂上に切込みを入れ、本紙を表装裂から取り外した。本紙の裏面に縁紙を取り付けて裏面から濾過水を噴霧し、仮張板に張り込んで画面を平滑にした。本紙を取り外した後、表装裂から下軸、発装を取り外した（写真17）。

三、剥落止め（クリーニング前）

パッチテストや触診の結果、色材の定着が弱いと思われる箇所に、クリーニング作業を安全に行うための剥落止めを行った。鹿膠一・〇パーセントの膠水溶液と八〇パーセントのエタノールを用いて行い、十分な乾燥期間をおいて膠を乾燥させた（写真18）。



写真 17 解体



写真 18 クリーニング前剥落止め

四、濾過水を用いたクリーニング

本紙料絹と肌裏紙の接着強度が低下しており、表面に細かなひび割れが多く、水を通す前の状態では平滑ではなかったため、筆の毛に引っ掛かり料絹を損傷させる危険性があったため、乾燥状態での塵芥除去は行わなかった。

表面を機能紙で保護して裏面から水分を噴霧し、本紙に残っている総裏紙、増裏紙及び折伏せ紙を除去した。折伏せ紙を除去して皺が伸びた本紙を、石州紙と極薄い小麦澱粉糊を用いて仮裏打を行った。その後、五枚程度重ねた吸取紙を本紙の下に敷き、本紙表面から濾過水を噴霧して吸取紙に汚れを移動させる方法でクリーニングを行った(写真19)。本紙の様子を確認しながら複数回に分けて濾過水を噴霧した。その際、吸取紙は適宜交換し、以後の裏打や剥落止め等の作業に影響の出ない範囲まで適度に汚れを除去した。

クリーニング時の湿りを利用して本紙を仮張板に張り込んで画面を平滑にした。汚れが付着した吸取紙は一時的に保管し、所有者にご確認いただいた。

クリーニング後には鹿膠一・〇パーセントの膠水溶液と六〇パーセントのエタノールを用いて剥落止めを二回行った。

クリーニング後に残った料絹表面の繊維状の付着物をピンセットで除去した。

五、表面に塗布された膠の除去

過去の修理で絵具層に過剰に塗布された膠を、アセトニトリル二五パーセントの溶液で溶かし、表面から養生紙越しに吸い取り、除去した(写真20)。除去後、鹿膠一・〇パーセントの膠水溶液で絵具の強化を行った。

六、剥落止め(表打前)

クリーニング後に色材の定着を確認し、必要に応じて鹿膠一・〇パーセン



写真 23 表補絹



写真 21 表からの補修の除去(除去前)



写真 19 濾過水を用いたクリーニング



写真 24 表打



写真 22 表からの補修の除去(除去後)



写真 20 表打前剥落止め

トの膠水溶液で剥落止めを行った。

七、本紙表面からの補修

本紙表面から施されていた補修絹をを除去した。(写真21・22) 除去した補修絹の下から裏彩色が出てきた箇所、もともと料絹が欠失し、裏彩色が露出していた箇所には本紙の表面から補修(表補絹)を施した(写真23)。薄美濃紙で仮裏打した補修絹を欠失部分に合わせて切り取り、小麦澱粉糊を用いて本紙に嵌め込んだ。仮裏打は本紙への嵌め込みと同時に除去した。この処置により肌裏紙除去時に肌裏紙に裏彩色が付着することを防ぎ、裏彩色を画面上に残置させることができる。

補修絹には、電子線劣化を施した本紙に適切な絹目を選択した。本紙料絹の色調よりも若干薄い色味に天然染料で染色した後、灰汁で媒染定着させた。

八、表打

本紙表面を機能紙で養生し、常温抽出布海苔と二種の厚みのレーヨン紙(一二グラム／一八グラム)で二層の表打を施して、一旦乾燥させた。再度湿りを与えて平滑に伸ばした本紙に常温抽出布海苔と新糊を用いて、石州紙で三層目の表打を行った(写真24)。表打時の湿りを利用して本紙を仮張板に平滑に張り込んだ。

九、旧肌裏紙・旧補修絹除去

裏面より小筆で少量の水分を与えながら、ピンセットで徐々に繊維を引き抜くようにして旧肌裏紙を除去した(写真25)。作業は小区画ごとに行い、本紙に負担がかからないよう留意した。肌裏紙に施されていた補修絹も肌裏紙と同時に除去した。

旧肌裏紙除去後、全ての旧補修絹・補修紙を除去した。絹目や色調の異なる二種類の旧補修絹同士が重なっている様子が見られた(写真26)。

一〇、本紙裏面からの補修・裏面顕微鏡撮影

本紙組成と近似の補修絹を用いて本紙の裏面から補修を行った(写真27)。補修絹は表補絹同様、本紙料絹の色調よりも薄い色味に矢車等の天然染料で染色した後、灰汁で媒染定着させたものを使用した。



写真25 肌裏紙の除去



写真26 補修絹の重なり(裏面)



写真27 補修

一一、表打除去・肌裏打

本紙表面から濾過水を噴霧して表打三層目の石州紙と二層目のレーヨン紙を取り除いた。

本紙裏面から薄美濃紙と小麦澱粉糊（新糊）を用いて、肌裏打を行った（写真28）。その後、表打一層目のレーヨン紙を除去し、本紙に負荷が掛からないように平らな状態で乾燥させた。

肌裏紙の色についてはサンプルを用意して所有者と協議の上決定した。

一二、どうさ 罌水引き

本紙裏面から施した補修箇所、補彩の滲み止めのために罌水引きを行った。兎膠一・〇パーセント、明礬〇・一パーセントの罌水を使用した。

一三、増裏打

美栖紙と古糊を用いて増裏打を行った（写真29）。増裏打に使用する美栖紙の色味については肌裏打後の本紙に実際に使用する染めた美栖紙のサンプルを裏面に当てながら京都府の担当者と協議を行い決定した。

一四、折れ伏せ及び二回目の増裏

亀裂や折れが発生している箇所及び今後発生すると予見される箇所に、細い带状の楮紙による折れ伏せを施して補強し、再発及び今後の進行を防止した（写真30）。折れ伏せは強度を持たせるために楮紙の抄紙方向と直角になるように裁断した。

折れ伏せを挟み込むように二回目の増裏打を施してから仮張板に張り込み本紙を平滑にして安定させた（写真31）。

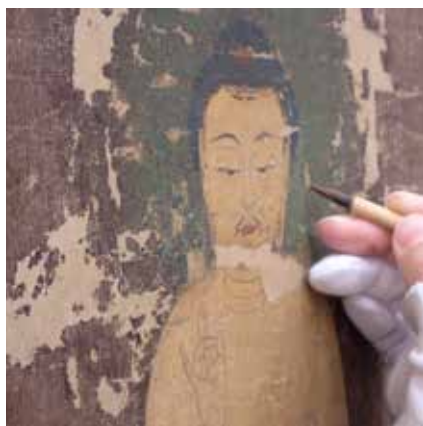


写真 32 補彩

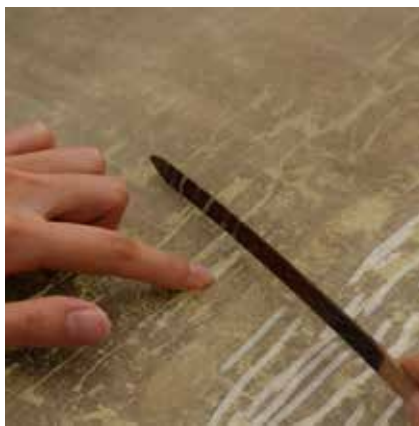


写真 30 折れ伏せ



写真 28 肌裏打



写真 33 表装裂取り合わせ協議



写真 31 2 回目の増裏打



写真 29 増裏打

一五、一回目の補彩

補修箇所にて二回目の罌水引きを行った。罌水の濃度は一回目と同様とした。補修箇所にて補彩を施した(写真32)。補彩は本紙無地場の色調を基調色として、本紙が違和感なく鑑賞できる程度に行った。彩色には藤黄、棒絵具の藍と洋紅を混色して使用した。補彩は最終的な色味になるまで、複数回に分けて慎重に行なった。

一六、表装裂の新調と調整

所有者及び行政担当者との協議(写真33)の上で決定した表装裂に、薄美濃紙と新糊で肌裏打を行った(写真34)。その後、美栖紙と古糊で増裏打を行い、本紙との厚みや柔軟性のバランスを調整した(写真35)。

一七、付廻し及び中裏打

新調した表装裂地を二段仏表装の形で本紙に付廻した(写真36)。

美栖紙と古糊を用いて中裏打を行った(写真37)。平にして乾燥させた後、再度適度な湿りを与えて仮張板に張り込んだ。

一八、二回目の補彩

本紙に裂がついた状態での見え方を確認し、二回目の補彩を行った。

一九、総裏打

本紙の耳折を行い、表具巾を確定した。その後、宇陀紙と古糊を用いて総裏打を行った(写真38)。



写真 38 総裏打



写真 36 付廻し



写真 34 裂の肌裏打

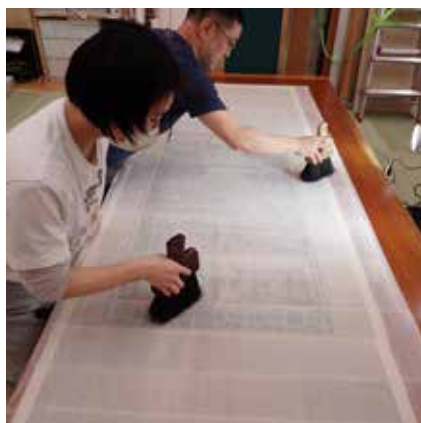


写真 37 中裏打



写真 35 裂の増裏打

二〇、三回目の補彩

仮張板に張り込んだ本紙に補彩を行った。二回の補彩で基本の色味を施したが、裂との調和を見つつ、最終的な仕上げ補彩を行った。

二一、裏摺・裏張り

掛軸の巻舒による摩擦を軽減させるため、裏摺を行った。イボタ蠟を裏面に薄く塗布し、水晶の数珠を用いて表装裏面を平滑にした。

表面を伏せて仮張板に張り込み、一定の乾燥期間を設けて本紙の伸縮を安定させた。

二二、仕立て

十分に乾燥させた本紙を仮張板から取り外し、耳を漉き、発装、軸首を取り付けた軸木、鐙、啄木を取り付け、掛軸の形に仕立てた(写真39)。軸首には蓮華唐草文金鍍金軸を新調した(写真40)。

下軸には修理年度等を揮毫した。

二三、収納

新調した太巻添軸を取り付けた本紙を羽二重の袱紗で包み、既存の屋郎箱に納入した(写真41)。

修理中に生じた旧表装裂や下軸発装等の古巣類と過去の修理銘墨書は中性紙製の保存箱に納入した。



写真39 仕立て



写真41 納入



写真40 新調蓮華唐草文金鍍金軸



写真42 天明6年修理銘墨書

〔特記事項〕

◇旧肌裏紙

通常肌裏紙は同じ紙繊維で漉かれた紙を同じ色味に染めた紙を用いて行われる。本文化財は今回の修理前に少なくとも二回(ないし三回)、肌裏紙の除去を行わずに実施されている。損傷箇所や肌裏紙の除去が容易な部分のみを除去し、それ以外の箇所は残置したまま補修を行い、古い紙を残したまま

部分的に新しい紙を肌裏紙として膏藥のように貼り付けていた。そのため肌裏紙層は一枚ではなく部分的に重なり合い二重、三重になっていた。肌裏除去前の裏面はパッチワークのような構造で、料絹との接着強度もまばらであった。彩色箇所（裏彩色箇所）では絵具焼けが起きており、乾式肌上げ法の確立以前には絵具層を損傷させずに肌裏紙を除去することは困難であったと想像できる。過去の修理で必要以上に無理をして肌裏紙を除去せず、残したまま修理を行なってきたことが、比較的裏彩色が健全な状態で残った要因であったともいえる。

◇旧補修絹

旧補修絹は表面から一種類、裏面から二種類使用されていた。補修された時代はそれぞれ異なり、修理の度に過去の補修痕を解消せずに新しく補修が行われていた。補修絹は欠失の形通りには入れられてはおらず、帯状に切った絹や、欠失よりも大きく切った絹等で補修されており、補修絹同士が重なっていた。欠失箇所によっては紙帯で補修されている部分もあった。

◇修理銘墨書

修理前の表装裏面にあった平成十二年の修理銘墨書のほか、箱内に天明六年（一七八六）の修理銘墨書が納入されていた（写真42）。この墨書は前回修理時に裏面から取り外されたと思われる、二回分の修理記が現存している。

二枚の墨書は今回の修理で発生した古巣類と共に新調した中性紙製の保存箱に納入して返却した。

南天薬師如来 所持善恵之

丹州何鹿郡高津観音寺常住

天明六丙午五月日修補之者也

令法久住利益人天為也

補墮落山観音寺

多聞院

盛圓

大聖院

智真

◇裏彩色

本紙裏面に施されていた裏彩色は丁寧な色分けがされていた。何度か修理を経ているが、肌裏紙を除去しきれずに残存して修理を行ってきたため、結果的に厚みのある比較的健全な状態で残っていた。

◇補彩

主に薬師如来の金色（首欠失箇所等）の見え方に留意しながら、全体のバランスが崩れないように作業を進めた。彩色には藤黄、棒絵具の藍と洋紅を混色して使用した。補彩は最終的な段階まで、複数回に分けて慎重に行った。

◇修理後赤外線写真（次頁）

本文化財の魅力の一つは画面下部に描かれた十二神将の個性的な風貌や迫力ある表現である。経年により可視光での視覚が困難になりつつあるが、赤外線照射による写真撮影により制作当初の姿を想起することが可能である。次頁に一部抜粋して掲載する（修理後赤外線写真1～17）。



修理後赤外線写真 2



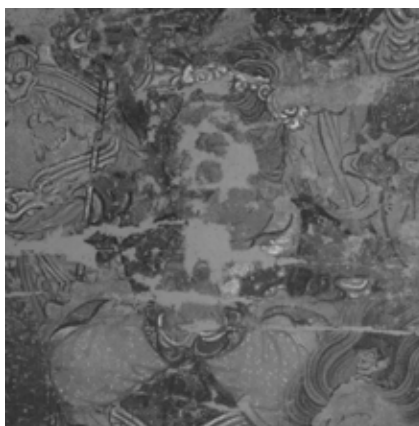
修理後赤外線写真 1



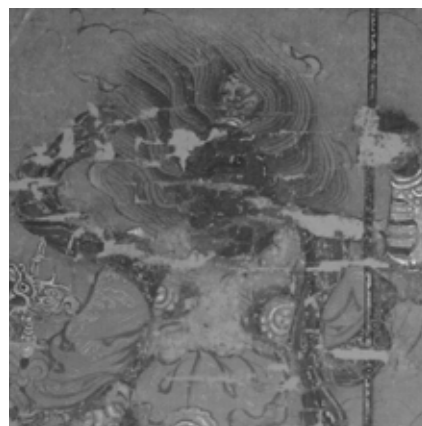
索引図 (数字は写真番号)



修理後赤外線写真 9



修理後赤外線写真 7



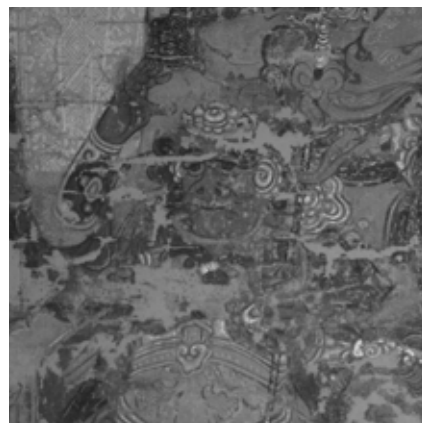
修理後赤外線写真 5



修理後赤外線写真 10



修理後赤外線写真 8



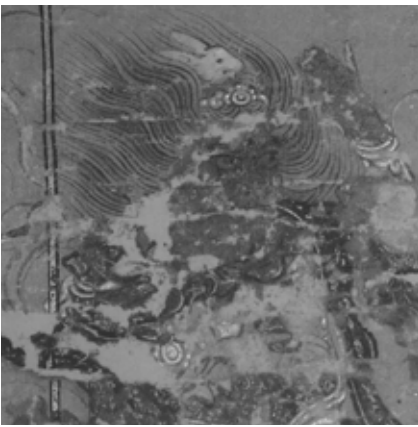
修理後赤外線写真 6



修理後赤外線写真 4



修理後赤外線写真 3



修理後赤外線写真 15



修理後赤外線写真 13



修理後赤外線写真 11



修理後赤外線写真 16



修理後赤外線写真 14



修理後赤外線写真 12

本事業は、公益財団法人三菱財団の文化財保存修復事業助成による助成金を受けて実施されました



修理報告書

絹本著色薬師十二神将像

宗教法人観音寺蔵

令和8年3月23日

編集 株式会社光影堂

京都市下京区河原町通五条下る本塩竈町 583-5

KAWARAMACHI PLACE 1002

不許複製・無断転載 ©2026 KOEI-DO Co., Ltd.